

第 65 回 IEC 総会パネル討論に参加して

GE エナジー
鈴木 浩

白羽の矢

2001 年の年初、当時三菱電機で役員技監として新規事業に向けた技術経営に携わっていた私のところへ、生産技術本部経由で経済産業省からの依頼があるという。IEC 総会でのパネル討論「IEC 標準の世界への適合性」Global Relevance of IEC Standards に参加してほしいというものであった。私自身は標準化や規格との関わりといえば、電気学会の電気規格調査会の中にあつた国際化のワーキンググループで、主査の電力中央研究所高橋一弘氏の指導で委員を務めた経験程度であつた。このように、直接は規格にかかわっていなかつたのでパネル討論への参加は躊躇するところがあつたが、開催地がフィレンツェだということもあつて承諾した。

前回の IEC 総会での日本からのパネリストであつたソニーの山田敏之氏に、そのときのお話を聞かせていただいた。山田氏とは日本工学アカデミーの会員として親しくさせていただいていた。氏は、以前から IEC の活動にかかわっており、特別委員会のメンバーでもあつた。パネル討論では、わが国の規格がなかなか IEC に認められず、国際化がしにくい、日本の規格も工学上は認められるべき条件を満たしていると主張されていた。氏のパネリストとしての存在感が、引き続き日本からパネリストを出す要因であつたと聞かされ、自分の役割の重大さに初めて気がついた。

次に、次期 IEC 会長となる予定の東芝の高柳誠一氏にお目にかかり、わが国の IEC に対するスタンスをうかがつた。高柳氏も日本工学アカデミーの重鎮で、日ごろご指導いただいていた。氏からは、「企業の技術経営の視点で、規格をどう捉えているかを話されればよいでしょう。経済産業省の言うことは必ずしも聞かなくてもいいですよ」とのご意見を伺い、内心ホッとした。

そして、経済産業省との事前打ち合わせが行なわれた。当時、私が力を入れていた活動に、電気学会での電気技術史研究と、日本電機工業会の委員会での配電電圧の昇圧推進があつたので、それらに絡む話をすることに決まつた。

フィレンツェとピサの斜塔

折角イタリアに行くのであるから、この機会に仕事もしてしまおうと、ミラノにある CESI という、電力技術研究所に知人を訪ねた。こことは、共同で仕事をしていたし、CESI の所長が私の参加するパネル討論のメンバーであるのでその事前の調整も行なつた。

フィレンツェには 1991 年 CIGRE（国際大電力システム会議）で東京電力林喬氏と訪れて以来、十年ぶり二度目の訪問で、この町がピノキオの物語の発端であることを知っていた。久しぶりにベッキオ橋やウッフィーツィ博物館を見学した後、お土産屋さんでフィレンツェの近くに位置するピサの斜塔をかたどった電気スタンドを購入した。

2001 年 10 月、フィレンツェの国際会議場で開催された IEC 総会は、TC や SC を含めて、1 週間開催され、50 カ国から 1500 名が参加していた。日本からは、経済産業省の武田貞生審議官を始め 140 名の参加があった。三菱電機からは、私を含めて 4 名が参加した。

事前に開かれる各種委員会に引き続く総会の最終日にパネル討論が計画されていた。当日の 10 月 19 日午前中にはパネル討論の下打ち合わせが、国際会議場の屋根裏部屋のようなところで行なわれた。司会をする現 IEC 会長のスイスのフュンフシリング氏を中心に、各パネリスト、IEC 事務局長を交えて行なわれた。会長は自分の名前がドイツ語では、5 シリングなのだと説明して皆を和ませた。パネル討論ではストーリーを決めずに自由に発言してほしいといわれた。

パネリストは、欧州からは、イタリアの二名（ABB の規格担当、CESI 所長）、フランスの Legrande から一人の計三名、北米からは、カナダ IEC の関係者とアメリカの Legrande からの計二名、アジアからは私一人が参加した。IEC 会長の司会の下、「IEC 標準の世界への適合性」Global Relevance of IEC Standards について議論した。

私の発表の番になったとき、昨夜購入した電気スタンドを取り出し、こうした歴史的モニュメントをお土産に買って帰れるのはうれしいが、日本ではこれは使えない。なぜなら、電圧も違うし、コンセントの形状も違うからだ、導入した。

なぜ日本では、100 ボルトが使われるのか。それは明治時代にさかのぼる。わが国の配電電圧を決めるとき、米国、欧州と比べ、湿度が高いこと、生活が畳の上で行なわれ、靴を脱いで生活していることから絶縁と安全上の問題があり、他の国よりも低い電圧を使うことになった。数字は、丸めた数字を使うこととし、100 ボルトとなった。その当時、1 ドルをいくらにするかの議論もあり、300 円と 400 円の間でせめぎあいがあって、結局 360 円に落ち着いた。その理由は、円は 360 度だからであった。こうした数字の決め方は日本独特なのであろう。

討論の中では、当方からは、今の IEC 標準が欧州中心となっており、一つの標準化を主張している問題点を挙げ、柔軟な標準の必要性、アジアからの発信、そのための改革案について提言した。標準化における各国の気候的、文化的違いを重んじることの必要性、LINUX の開発過程のように、標準化を固定化せず柔軟に行なうことの必要性を強調した。わが国の存在感を強く参加各国に印象付けると共に、欧州規格を中心とした標準化の動きに牽制を行い会長の賛同を得た。

パネル討論の中では、わが国同様に IEC と別の規格をもつアメリカのパネリストとは大いに意気投合した。

総会のその後

次年からの IEC 会長には予定通り東芝の高柳氏が就任した。また、翌年、北京で開かれた IEC 総会では、東芝の有信睦弘氏がわが国の代表でパネル討論に参加した。引き続きわが国からパネリストを出せたことで、私の責任が果たされたことに安堵した。

フィレンツェからの帰国途中に、中国の北京にわたり、中国の電力企業連合会、電力工程顧問有限公司、電力研究院などを訪問し、ビジネスの打ち合わせをおこなった。これらの話し合いでは、IEC のパネル討論に出席したことがうまく機能した。この頃中国では、IEC の規格の採用と、それよりも厳格な日本の規格のどちらを採用するかでゆれていた。現在 IEC で進められている標準の適合性の話は、中国でも理解してもらえた。その後は、そのまま、重慶に入り、日中韓工学アカデミーのラウンドテーブル会議にも出席した。ここでは、技術者教育の認定制度について議論した。

2001 年は、実に一年間に 6 回の海外出張があり、その 1 回のうちにもこのように数カ国、数都市を回るといふあわただしい年であった。

規格とのつながり

帰国後は、それまで日本電機工業会の委員会で行なっていた配電電圧の昇圧推進への動きに力を入れ、二酸化炭素排出量の削減効果の算定、欧州や東南アジアでの動きを調査し報告書にまとめた。東南アジアでは、IEC 規格が標準をなっており、欧州企業が市場を占めていた。配電電圧も欧州と同じである。そのため、国内ではわが国からも積極的に IEC の標準化に参画するように、大いに喧伝した。

電気学会研究経営理事、副会長として、電気規格調査会にも参加したことも手伝って、2002 年 IEC 活動推進会議議長賞を受賞した。長い期間 IEC に貢献してこられた方々に贈られる貴重な賞を、たった 2 年間の活動に対して頂戴したのはありがたいことである。

現在は、直接 IEC にかかわる活動は行なっていないが、電力系統関係で IEC の規格のガイドラインとなる報告書をまとめる CIGRE にかかわる活動を行なっている。受賞への多少なりの恩返しのつもりである。